

29 リヨンにおける医学小史(二)

—オテル・ディウとシャリテ—

小林 晶

中世から十九世紀まで、リヨンでの慈善医療は二カ所で行われてきた。オテル・ディウ(Hotel-Dieu, HD)とシャリテ(Charite)である。他のカリトック支配地域にもみられるように、これが近代的医療機関の濫觴である。

中世では巷に貧者や病人が溢れ、収容するには特別の施設が必要になった。この他に巡礼者の病人、妊婦、孤児なども戦争や飢饉により増加するばかりであった。

本格的収容施設としては一一八〇年から二年間にわたって建築された、ポン・デュ・ローヌ(Pont du Rhone)病院の出現をまたねばならなかった。これは現在のHDの位置に建築された。ここでは僧職者も一緒に居住して前述の人達や行き倒れ、疲労者をも収容し、教会や墓地もあり宗教色の強いものであった。これが今日のHDの

起源である。

十四世紀までに収容施設は多少増えたが、HD以外はごく小さく、職員にはボランティアの参加が多く、医師は不在であった。

一四五四年、最初の医師が赴任して、漸く医療の手が差し伸べられることになったが、収容を要する人は増加するばかりであった。相変わらず、巡礼者や貧者はもちろん病人は結核、レブラを始めとして、皮膚病、精神病、妊産婦、関節疾患などで占められた。十字軍の最盛期には戦傷者と壊血病が加わった。

カトリックの影響で収容者にはかなりの規則が強制された。例えば毎日の礼拝は欠かせなかった。入口で着物を施設のものに着替え、手足を洗い、告白のあと心身を浄め入室が許可された。治療は瀉血、焼灼、水銀、鉄、鉛・銅の酸化物、硼酸、葉草、ジンジャー、阿片、蜂蜜、アロエ、蠅、おたまじやくし、蝸牛、蝮、とかげ、ときには排泄物さえ使用した。運営は喜捨、不動産、教会団の補助金が基本となり、後には地方自治体の補助、多数の遺産、慈善団体よりの献金もあった。

中世にはこれらの他に、施設を別の面から脅かすペストの流行があった。記録に残るだけでも大流行した年は十二年あり、最悪時は一時間に四百人、二カ月に一万人死亡、リヨンの人口の三分の一が死亡したという。

十六世紀には、フランソワ・ラブレ (François Rabelais, 1532-1535) が勤務し、「パンタグリユエル (Pantagruel)」はこの時期に執筆された。また、ノストラダムス (Michel Nostradamus) が一五四一年に勤務している。

十七世紀にはシャリテが建設され、HDも新しい教会、回復室を増築し、今日もその姿を残している。十八世紀の有名な建築家ジャック・スフロ (Jacques Soufflot) の作成したドーム、ファサードがロヌ河畔にある。

一七五五年には千三百床を有し、収容者は六百名が外傷、皮膚病、四百四十が有熱者、五十が精神病、お産・捨て子が三十であった。(子供は七歳以下がシャリテ、それ以上がHDと決められていた)病院の一日の行事は、六時朝食、八時回診、十時昼食(かなり内容は良かった、ブドー酒、水もあった)、午後は面会、瀉血、換気などが行われた。

革命時、宗教色が薄れ財政的には困難を極めた。とく

に、国民公会派による包囲(1793)時は治療材料が底をつき、部分的には砲弾で破壊された。ナポレオン時代は戦傷者で溢れ、一八〇八年にはチフスが流行し、収容場所を拡大せざるをえなかった。この頃の僧職は修道僧百十名、尼僧百九十名であった。

リオン市医務局 (Hospices Civils de Lyon) が創設されると(1796)、シャリテとともに傘下に入った。Ecole secondaire de Médecine (HD内、一八二二)設立以来、種々の教育制度の改革と施設の改変が行われた。都市再開発と新学部に移転(1833)にともない、中世以来並行して活動してきたシャリテの廃止が決定し、HDはその部分的移転を受入れ、博物館が開設(1935)されて、今日に至っている。現在、医療活動は古い建築物の中の近代的施設で行われていて、研修施設や医学出版業務の任務も果たしている。

(福岡整形外科病院)